

目次

- ・ 2000年度日本図書館文化史研究会第17回研究集会・総会報告
- ・ 『図書館文化史研究』20周年記念号への投稿について
(20周年記念事業実行委員会)
- ・ 関東地区研究例会(2000年度第2回)について
- ・ 2001年度第18回研究集会について
- ・ 会員動向

2000年度図書館文化史研究会 第17回研究集会報告

第1日：自由発表

発表1：世界最初の‘公立’図書館

ピーターバラ・タウン・ライブラリーの歴史をふりかえって

山本 順一

(図書館情報大学)

1833年に住民に対してサービスをはじめたピーターバラ・タウン・ライブラリーは、公的資金によって運営されるという意味で、世界で最初の公共図書館として知られる。アメリカ図書館史の文献にも、その存在が記述されることが少なくないが、Encyclopedia of Library and Information Scienceなどの図書館情報学分野の事典にその項目を見つけることはできない。これまで意外なほどに研究の対象とはされてこなかった。

本報告では、ニューハンプシャー州の小さな、しかしそれなりに豊かなこのまちに生まれた図書館の誕生の背景、そしてその発展の歴史を紹介した。まちの有力者が図書館委員会の理事に選挙で選ばれ、タウンミーティング(住民総会)で館長人事や図書館の基本方針について議論されてきた。図書館運営に必要な資金は、税に依存するだけでなく、市民の寄付や遺贈に負うところも大きかった。歴代の大口寄付者のなかに、あのアンドリュー・カーネギーの名を見出すこともできる。

この図書館に関心のある向きは、その現状をインターネット上のホームページにみることができる (<http://www.ci.peterborough.nh.us/library/>)。

発表2：トロント市立図書館の児童サービス：G.ロック館長の就任から
「少年少女の家」開設まで 一第一次大戦を背景に一

深井 耀子

(梶山女学園大学)

本発表は同図書館の年次報告を第1次資料とする。図書館史研究の基本資料の一つであるが、時代の制約をまぬがれず、特に戦時中のきびしい言論統制下にある表現であることを痛感させられた。質問としては第1に国民的統合の面が強調されるが、児童の要求からの視点はどうか、第2に新移民の母語への配慮についてであった。いずれも本質的な問題であり今後の研究課題として受け止めた。発表の機会を与えていただき感謝している。

発表3：江戸時代における広域出版流通の形成と課題

大和 博幸

(国学院大学)

江戸期の刊行物の大半は三都で製作・販売されていた。だから地方読者は三都から一方的に受容するのが常で、三都・地方間の流通ルートが存在は不可欠であった。本発表ではルート解明の前提として、刊行物の奥付を手が掛かりに広域流通の形成と展開を考えてみる。

三都と地方書肆間の広域流通は17世紀半頃に、三都書肆と特定城下町や名門前町の地方書肆一人ずつの組み合わせで始まった。その後暫くは進展もなく、推移する。しかし、18世紀になり識字能力の向上と共に、ジャンルも7～8に、書肆の組み合わせも三都の内の二地の書肆二人以上と地方書肆一人以上へと増え、特に三都書肆+名古屋書肆の組み合わせの流通網が完成し、それを中核により広域化した流通網が形成されるようになる。そして19世紀に入ると、ジャンルも10を越え、各地で新興書肆も大幅に加わり流通地域も増加して組み合わせも多様となり、広域流通が地方に根付きほぼ確立したといえる状況になる。

こうした広域流通の進展は、三都本屋仲間書肆に影響を与え何らかの対応を必要とさせた。それはその後新興書肆が仲間運営に関与する機会が増えることからみても、発足以来維持してきた運営方向を製作面重視から販売面重視へ組織的に転換することであつたらう。

発表4：射和文庫の設立—地域社会のなかでの機能

細井 岳登

(立教大学大学院)

近世の文庫を捉える視角として、近代的公共図書館像の遡及ではなく、近世という時代のなかで、幕藩制という歴史的な社会における固有の存在としての対象化が求められる。

幕末期には民間レベルでも書物の集積が行われるようになったが、その一方で書物へのアクセスの不平等が顕在化してきた。伊勢の射和文庫は、その設立にあたり

書物を求めるものには自由に読ませようという理念が掲げられた。また文庫は書物の閲覧に限定されず、講釈、歌会、茶事など広く文化的活動の場であった。そして設立者竹川竹斎は、文庫を竹川家から独立した、いわば「公的」な施設として、永続性を持たせようと努めていた。

射和文庫の場合、経済的基盤として藩当局への基金の預託—利子運用方式を採用し、年貢収納のなかで調達される仕組みをとっていた。こうした地域社会との関係は、文庫の運営という枠を越えて、農民の困窮など地域社会の抱える問題への関心とも結びついてきた。

このように幕末期の文庫は、近代の図書館のように書籍利用のための施設という機能の専門化＝限定化は進んでおらず、地域の社会システムのなかにあって広く文化的な活動の拠点たらんとする方向性が窺える。

発表5:公共図書館の教育機能に関する論議

—昭和戦前期を中心にして—

泉山 靖人
(東北大学)

公立学校制度が構築され、その就学率・進学率が上昇する時代において、図書館に関連して学校と公共図書館の教育制度上の役割の差異あるいは連続性についてかに議論されていたかを、昭和初期の事例をもとにまとめることを試みた。

図書館界の内部に現れた言説からは、年齢あるいは学校の内外による区分を行うもの、および両者の一体化を構想するものの3つの型をみることができた。一方、文部省社会教育課関係者の著書を見たかぎりにおいては、そこには両者の役割を区分する指標を年齢とする考え方が色濃く認められる。しかし、宮城県の事例を見ると、学齢期児童への働きかけにおける図書館の役割はこの枠を超えて実践に結びついている。

なお、本報告に対して、資料の選択方法の妥当性について指摘がなされたことを念のために書き添えておく。(発表者)

発表6:イタリア語文献に現れた図書館

—図書館人類学試論—

宍道 勉
(鳥取女子短期大学)

図書館人類学

1) 定義

人は何故図書館を作ったのかを探る、文化によって異なる国内外の図書館の比較研究である。

2) 目的

普遍性、客観性、論理性を追求しない、つまり文化人類学的手法を取る

3) 方法

a. 文化の比較

図書館ガイドを文献的に研究する、その図書館の歴史を探る

b. 野外科学 (フィールド・ワーク)

インタビューを行うが、その対象は利用者には利用目的を、司書には職業意識、社会的地位などを測る。

c. 歴史研究

都市と図書館との関係を探る

・歴史に現れた図書館と時代の変遷に伴う役割の変化

d. 文学・映画に現れた図書館

作品に登場する図書館を捉えて、作家の図書館原体験・図書館観を探る

今回は De Bibliotheca / Umberto Eco. - Milano : Biblioteca comunale (Palazzo Sormani), 1981. - 35 p. ; 17 cm. および「薔薇の名前」(Il nome della Rosa, Milano, Bompiani, 1984) (河島英昭訳, 東京創元社, 1990) をあげてその方法を紹介した。

第2日：テーマ発表

：図書館づくりの思想と実践 —その歴史的検討—

*発表1, 発表2につきましては都合により次号に掲載します。

発表3：図書館づくり運動・前史 —図書館史研究の視点から—

奥泉 和久

(横浜女子短期大学)

わが国における「図書館づくり運動」を歴史的に見るため、本発表では戦前から戦後にかけて、青年会が地域に図書館づくりを実践してきた例をとりあげた。

青年会図書館は、はじめ部落単位(支会)の図書の寄せ集めにすぎなかったが、大正期の青年団自主化以降、自主・独立を運営方針とする多くの図書館が出現した。やがて文庫などが統一され、図書館が地域住民のための社会教育機関として定着すると、「村立化」の問題が起こった。だが、行政による図書館運営は、青年会の選書権を制約するなど青年たちの運営の方向性と相容れない面を浮き彫りにした。鼎青年会などのように、村立化よりも青年会運営の自主性を選択する青年会も現れた。

上郷では、戦時体制により村立化を余儀なくされたが、戦後青年会は村から運営を委託されると、図書館運営の主導権を取り戻した。青年たちは、戦前・戦後をとおして図書館を地域住民の学習・娯楽機関として位置づけ、自主運営を運営の基本に置いた。青年たちは、図書館経営の担い手でもあったが、利用者としての主体形成を実現することで図書館づくり運動を推し進めた。

2000年度 日本図書館文化史研究会 総会報告

開会にあたり、図書館情報大学の寺田光孝氏を議長に選出し、議事に入った。議案1及び議案2については、事務局長石井氏から説明を受け、議案3については20周年記念事業実行委員会の小黒氏から説明を受け、すべて議案の通り承認された。なお、20周年記念事業実行委員会については、ニューズレター72号参照のこと。また、20周年記念事業の検討過程で出てきた、日本学術会議に学会として登録を申請する件については、会員の皆様の意見を募ることになった。(本号別項参照)

議案

1. 1999年度報告 (資料: 活動報告及び決算報告はニューズレター72号掲載)
 - a. 活動報告 (項目別支出一覧はニューズレター本号別掲)
 - b. 会計報告

2. 2000年度活動計画 (案)
 - a. 2000年度活動計画案
 - ①機関誌『図書館文化史研究』No. 17 (2000) の編集・刊行
2000年9月刊行。会員には発送済み。
 - ②『ニューズレター』の編集・刊行 (No. 72-75の4回、No. 72-73は刊行済)
 - ③第17回研究集会・総会 (東京) の開催 (2000. 9. 9-10)
 - ④研究例会の開催
従来からの関東地区での開催は年3回を予定 (第1回は6. 17開催済)
関西地区においても、随時開催してゆきたい。
 - ⑤運営委員会の開催 (年4回程度)
第1回は、5. 3開催済
 - b. 2000年度予算案 (2000. 4~2001. 3) (資料はニューズレター73号掲載)

3. 20周年記念事業準備の推進 資料別添

事務局報告

2000年8月末現在 会員数137名 (4月以降2名退会、1名除籍)
2000年度会費納入状況 8月末現在 既納入者104名 (約76%)
次年度研究集会・総会開催地について
会員名簿について (2001年2月)

決算報告・項目別支出一覧

事務局費 (75,915)

会議費	1,575	2000.2.26	於：東京
消耗品費	9,975	1999.4.9	事務局長ゴム印作成
	800	1999.4.16	郵便振替払込票会名印刷
	24,255	1999.4.19	会名入封筒作成
	409	1999.4.24	金銭出納帳等文房具購入
	808	1999.5.2	パソコン用宛名シール購入
	3,240	1999.8.6	同上追加
	1,628	1999.12.4	ファイル等文房具購入
	525	1999.12.11	定型外大封筒等文房具購入
小計	41,640		
通信費	220	1999.4.14	東京→京都送金手数料 (通常)
	140	1999.4.16	東京→京都送金手数料 (定額)
	5,000	1999.4.23	80円切手等事務局用
	1,300	1999.11.14	葉書、切手事務局用
	2,900	1999.12.16	80円切手等事務局用
小計	9,560		
交通費	23,140	2000.2.26	石井上京 (京都・東京往復)

ニューズレター (97,911)

No.68	9,450	1999.5.15	編集印刷
	11,600	1999.5.15	送料
小計	21,050		
No.69	12,200	1999.8.7	編集印刷
	12,000	1999.8.7	送料
小計	24,200		
No.70	15,030	1999.11.12	編集印刷
	13,500	1999.11.12	送料
小計	28,530		
No.71	12,131	2000.2.16	編集印刷
	12,000	2000.2.16	送料
小計	24,131		

機関誌刊行費 (214, 569)

編集費	525	1999. 5. 25	原稿コピー発送用大封筒購入
	400	1999. 6. 7	原稿コピー発送
	1, 660	1999. 9. 1	原稿コピー作成
	960	1999. 9. 2	原稿コピー発送
	1, 080	1999. 9. 12	送料小黒氏立替分精算
	1, 550	1999. 9. 18	原稿コピー作成
	2, 470	2000. 2. 26	送料小黒氏立替分精算
小計	8, 645		
発行費用	1, 500	2000. 1. 31	協力執筆者、海外会員への送料
	177, 119	2000. 2. 2	日外支払い (委託送料含む)
	6, 090	2000. 2. 14	保存用5部買取
小計	184, 709		
抜刷費用	5, 150	2000. 2. 2	抜刷用折本 (日外)
	16, 065	2000. 2. 14	抜刷製本
小計	21, 215		
研究会運営費 (8, 800)			
研究集会・総会	900	1999. 9. 10	総会用資料作成
研究例会	3, 100	1999. 4. 24	関東地区研究例会打ち合わせ
	820	2000. 2. 26	中林氏立替分精算
小計	3, 920		
運営委員会	3, 980	1999. 12. 23	会議費

日本図書館文化史研究会20周年記念事業について (案)

2000. 9 20周年記念事業実行委員会

1. 『図書館文化史研究』19号 (2002年9月刊行予定) を記念号とする。

○ 100ページ程度の増頁 (販売価格は2, 500～3, 000円程度)

○ 増頁による価格増部分は積立金から拠出する

※ 150名×1, 000～1, 500円=150, 000～225, 000円

○ 記念号の内容

・ 「20周年に寄せて」 + 論文

- ・ 執筆依頼者（案）：石井敦，岩猿敏生，藤野幸雄（下記第4項参照）
石井敬三，小川徹，河井弘志，川崎良孝，阪田蓉子，寺田光孝，中林隆明，
山口源治郎，山本順一

※ 2002年9月の刊行を確実にするため，2000年秋に論文執筆を依頼する

2. 20周年記念集会の実施

- 日時 2002年9月 日（土・日）（日時は今後調整する。）
- 場所 法政大学
- 記念シンポ テーマ（案）「図書館文化史研究の回顧と展望」
 - ・ 発表者：石井敦，藤野幸雄，岩猿敏生
 - ・ 司会：寺田光孝

※ 2001年研究集会は関西地区で開催する

3. 20周年記念パーティの実施

- 日時 2002年9月 日（土）（上記集会の日時に同じ）
 - 場所 私学会館
 - 役割分担（案）
 - ・ 司会：石井敬三，開会の辞：阪田蓉子，乾杯：中林隆明，閉会の辞：小川徹
 - ・ 祝辞：日本図書館情報学会，日本図書館研究会
 - 会費 5,000円程度
- ※ 不足分は積立金より拠出する

4. 名誉会員の推戴

- 石井敦，藤野幸雄，岩猿敏生

（文書中敬称略）

☆ご意見をお寄せください。

学会として登録申請することの可否について

去る9月9日の総会の席上、20周年記念事業に関する議案を審議する過程で、実行委員会での議論として、20周年を機に日本学術会議に学会として登録すべく申請を行なってはどうかという意見があったことが紹介された。

総会でも、若干の論議があったが、とりあえずニューズレターで会員の意見を募って意見分布を把握することになった。

20周年記念事業実行委員会での議論の発端は、学会として認められている団体であれば、①集会参加の際などに出張扱いとなる学校もあり、会員の参加が容易になる、②会場を借りる際にも、割引や減免措置がある場合が多い、③国立情報学研

究所のサーバ上の academic village にホームページ用のスペースを確保することができる、などのメリットを念頭に置いたものであった。

一方、①申請手続きがかなり面倒で、沢山の書類を作成しなければならないらしい、という情報もあり、②現在まで、ある意味で同好会的な存在であった当研究会が学会になるとすれば、個々の会員にもそれなりの自覚が求められるのではないか、という指摘もあった。総会の論議では、会員数その他、必要最低限の条件で満たしていない項目があるのではないか、という指摘もあったが、概ね満たしているとの反論もあり、今後事実関係を確認する必要もある。

事務局あてに、是非会員の皆様のご意見をお寄せください。

『図書館文化史研究』20周年記念号への投稿について

20周年記念事業実行委員会

別記のように、2002年9月刊行予定の『図書館文化史研究』第19号を20周年記念号として増頁発行することになりました。

つきましては、会員の皆様で本号への投稿を希望される方は、氏名、連絡先、仮タイトルを2000年12月末日までに下記までご連絡ください。

なお、執筆要領は『図書館文化史研究』の通常号に準じます。(第16号掲載の「投稿規定・執筆要領」をご参照ください。)ただし原稿の締め切りは2001年12月末日とします。本号の性格上、締め切りは厳守願います。締め切りに遅れた場合、次号(2003年発行予定の20号)送りとなる場合がありますので、あらかじめご承知おきください。また原稿の送付先も下記となる予定です。

小黒 浩司

関東地区研究例会 (2000年度第2回)

日時：12月16日(土) 午後1時30分～4時ごろ

場所：明治大学 研究棟 第3会議室

発表 三浦太郎：ドイツ図書館界の動向 —ドイツ図書館研究所(DBI)の廃止を中心—

官部頼子：変換期における大学図書館運営—専任・専門職館長の意義—

会場案内

9月の研究集会の会場であった明治大学リバティー・タワーに隣接しています。リバティータワーから入って、エレベーターまたはエスカレーターで3階まで昇ります。降りて右側にリバティー・タワーの後ろにある研究棟への通路がありま

す。第3会議室は同じ階にあります。受付がありますので、お尋ねください。なお、リバティール・タワーの場所を記した地図は、ニューズレター73号を参照してください。JR お茶の水駅、または地下鉄神保町駅下車。明治大学駿河台キャンパスでリバティール・タワーを尋ねていただければ分かります。

**2001年度第18回日本図書館文化史研究会研究集会
日程のお知らせ及び発表者募集**

標記の研究集会を次の要領で開催する予定です。会員の皆様のご参加をお願いします。また発表者も募集します。発表希望者は、事務局までご連絡ください。

日程：2001年9月8日(土)～9日(日)

場所：京大会館（予定）

詳細はニューズレター次号以降でお知らせします。

~~~~~ 原稿募集 ~~~~~

- ◇『図書館文化史研究』18号(2001年9月刊行予定)の原稿を募集します。原稿の締切は2001年3月31日です。投稿を予定される方は事務局までご一報ください。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。
- ◇「ニューズレター」の原稿を募集しています。研究に関する情報、書評なんでも結構です。(できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を)事務局(石井)あてお送りください。

会員動向（住所変更 / 勤務先変更）

日本図書館文化史研究会 事務局 石井敬三